

フランス代表

ヴァンサン・ルフランソワさん



©fukuoka-now.com

国際都市福岡には多数のクリエイティブな仕事をしている外国人が住んでいらつしゃいます。今回芸術の本場フランス出身、ルフランソワ氏の話の伺いました。氏はイラストレーターとして、東京でもその名を知られ、更に母国でもマンガのアダプターとして、確固たるキャリアを積んでおられます。美しい碧目に映った日本。創作の苦勞について語っていただきました。

初めまして。ルフランソワです。いかにして私が福岡で創作活動をするに至ったのか？

よくきかれることですので、これに期に私の波乱万丈とまでいかず、ささ

やかと言うには波風にさらされ過ぎて私の半生を語ろうと思います。

では、仁義切らせていただきます。

おひげえーなすつて！

手前生国と発しますは、フランスはノルマンディでございます。「男と女」の映画の舞台にもなった土地で産湯を使い、幼少時住んでおりましたのは、「睡蓮」でおなじみの印象派の巨匠クロード・モネの生家のすぐ近所。姓はルフランソワ。名はヴァンサン。根っからのアート気質（かたぎ）でございますゆえ、不調法は勘弁していただきたく存じます。

高校を出ますと、名門ソルボンヌ大学に進学しました。これを言うとき皆さん驚かれますが、日本と違い入学するのは簡単なのでございます。専攻は美術。マンガ表現について博士課程まで残り、研究にいそしんでおりました。その頃、「日本に行ってフランス文化について広めて来い」、というお役目をいただき、私の方もまだ見ぬ日本に興味がありましたので、ありがたくお受けすることにしました。これが私の運命を変える決心になるとは夢にも思わず、半分観光気分、日本の地に降り立ったのです。時は1991年春、私25歳のことでした。最初に赴任してきたのがこの福岡の地でございます。

そこで私の運命を変える出来事に遭遇したのでございます。

ある女性との出会いでした。若かった私は出会いと同時に一瞬で祖国を捨て去る決心をし、彼女と結婚したのでございます。勢いで仕事までやめてしまいましたので、生活していくために仕事をしなければなりません。そこで始めましたのが、昔取った杵柄（きねづか）現在の仕事でもあるイラストレーター稼業でございます。それからは、とんとん拍子に：といきたいころですが、他人様に語るのとはばかられるような辛酸もなめて、喜びも悲しみも幾年月：。何とか現在に至っております。

ここ数年は東京のほうの仕事が多くなつてきて、ありがたいことです。

さて、創作活動のほうですが、ずっと自分の表現を模索しておりました。

もう20年も日本で暮らしておりますけど、感覚的にどうしても日本人になりきれません。日本人にとっては当たり前前の風景でも、私の目からは異質なものに見えるのでございます。それは、外国人が最初に京都に行つてときに味わう感動みたいなものではなく、日常生活でふとした瞬間に感じる違和感。カッコよく言えば、日常のなかの「詩」。それを作品にしたいと思うようになりました。

そこで描きはじめてのが、フランスのマンガ「バンド・デシネ」のスタイルで自分の世界観を表現した作品。後に週刊アサヒウィークリーに掲載された「wandering mind」（放浪）というシリーズの元型になるものでした。自分の本当にやりたいことはこれだ！と実感するに至ったのであります。先日、東京で個展も開きました。ホームページにも作品を載せてますので、どうかご覧になってくださいまし。

現在の活動について少し触れたいと思います。20年前、フランス外務省の派遣で日本にフランスを紹介するためにやってきた私が、今度は福岡市の依頼で姉妹都市であるフランスポルドーに日本を紹介するための作品を創ることになりました。

この仕事はこの20年間の総決算にしたいと思っております。この仕事をもって日本での生活の第一部が終わりつて感じて：。この20年間、異国の地で仕事面でも私生活面でも色々なこととありました。目を閉じると眠くなつてしまいます。日本で生まれた愛する息子も来年は高校を出て東京の大学に行くことになってます。これから第二部がスタートする感じでワクワクしています。とまあ、こんなところでよろしいでしょうか。